



夫が自宅療養となり、食欲も増し、体力をつけるべき時となりました。次第に温かくなってきましたので、外を歩きたい気分が出て来たようです。私もできる限り、誘い出して、一緒に外出するチャンスを作っています。歩く姿を眺め、やはり、杖があったほうがいいと感じ、退院後の最初のプレゼントにステッキを求めました。長さが調節できる、折りたたみ可能なものです。文字どおり、「転ばぬ先の杖」です。自立して歩くために、補助的に使用するものですが、夫は慣れないせいか、杖に頼ろうとしているように見えます。自立して歩くということはやはり

基本的なことで、生活の質を高めるうえでも大事なことです。また、公園の土の上を歩くのと、コンクリートの歩道を歩くのでは、感触が違い、脚への負担が少ないと実感するといいます。「杖」も筋力増強へ向かって、役立ってほしいです。

「杖」と言えば、なんと言ってもモーセの所持品として不可欠なものです。ただし、歩くために所持していたのではなく、羊を追うための道具でした。羊飼いのモーセが神の言葉を聞いた時、神は杖を用いて、モーセを預言者として働かせたのです。それ以降、モーセの杖は「神の杖」となり、モーセは杖を手放すことなく用いて、民を守り、導きました。契約の箱には、十戒を記した板、マナの壺と共に、芽が出たとされるモーセの兄アロンの杖が収納されたとなっていますが、大活躍したのはモーセの杖ではないでしょうか。モーセの杖は、自分を生かし、用いてくださる神の力の象徴でした。夫にとってもそうであるよう、杖が機能してほしいものです。



岩を打って水を出すモーセ
Rome, Catacomb of St. Callixtus

さて、今日は東日本大震災から 8 年目になります。あの日、あの時間を忘れることができません。私は坂道を急いでのぼっていました。足元がぐらぐらするのを感じましたが、急いだせいと思い、まさか、あのような大地震とは気がつきませんでした。家に帰ってから、テレビをつけて、目を疑うような光景を見ることになったのです。地震、がけ崩れ、津波などの自然現象は地形、地殻のために、日本の各地で繰り返し起きてきた大災害であり、避けられない自然エネルギーによるものだと思います。この災害を避けるために、また、被害を最小限に抑えるために、「転ばぬ先の杖」ならぬさまざまな教訓を学んできています。

けれども、このエネルギーが波及した東京電力福島原子力発電所の破壊、炉心溶融による放射能物質による被害は、「転ぶ」等を想定しなかった東電の「ツケ」による事故であり、災害ではなく、事件だと思います。本当に残念なことに、「転んでしまった」のです。

転んだ東電本社は立ち上がったようですが、いまま、フクシマは傷口から放射性物質という毒を出しています。大気も、大地も、地下水も、そして海にまで、傷口から膿みが浸みていっています。この毒はいつ無害になるのでしょうか？ なによりも大事な人の命、日々の暮らしは、汚染され、ズタズタになっています。特に若い人々は健康面で深刻な状態です。住まいや農地の汚染、農産物、海産物の汚染はいつ、回復できるのでしょうか。フレコンバックの汚染土、タンクの処理水はどこへいくのでしょうか？ 避難者は帰還しているのでしょうか？ 復興という言葉が聞こえますが、フクシマは転んだまま、立ち上がる事が出来ていないと思います。いつ、どのように、元どおりに立てるようになるという具体的な指針がないところで、原発の再稼働を行うという発想は、思考停止としか思えないのです。私の心の中からはフクシマの苦しみ、悲しみが消えることがないのです。